

# 看護における人材育成（教育）の国際協力・協働に関する文献レビュー

著者	山崎 好美, 梶井 文子, 田代 順子, 鈴木 良美, 菱沼 典子, 堀内 成子, 平林 優子, 酒井 昌子, 有森 直子, 林 直子, 江藤 宏美, 佐居 由美, 林 亜希子
雑誌名	聖路加看護学会誌
巻	11
号	1
ページ	38-44
発行年	2007-06-20
URL	<a href="http://doi.org/10.34414/00014986">http://doi.org/10.34414/00014986</a>



## 看護における人材育成（教育）の国際協力・協働に関する 文献レビュー

山崎好美<sup>1)</sup>、梶井文子<sup>1)</sup>、田代順子<sup>1)</sup>、鈴木良美<sup>4)</sup>  
菱沼典子<sup>1)</sup>、堀内成子<sup>1)</sup>、平林優子<sup>1)</sup>、酒井昌子<sup>2)</sup>  
有森直子<sup>1)</sup>、林直子<sup>3)</sup>、江藤宏美<sup>1)</sup>、佐居由美<sup>1)</sup>  
林亜希子<sup>1)</sup>

### 抄 録

看護における国際協力・協働における人材開発・教育領域の課題と方策を明らかにするために、「International Collaboration」あるいは「International Cooperation」がタイトルに入り、文献中に看護が入る文献を、検索年を指定せず選出し検討した。看護の国際協働・協力の英文献は31件あり、その中で人材開発・教育領域での協働・協力に関する文献は23件あった。23文献を先進国間、先進国と開発途上国の協働・協力の内容、成果、課題、方略に焦点を当て分析した。

先進国間における国際協働・協力に関する教育領域の協働の文献は、1997 - 2005年間に、9件であった。協働内容は、両国間（多国間）での大学間の交流、看護実践家への教育に関するプログラムが多かった。共通に見られた課題は、活動運営のための財源の確保、言葉の問題、活動評価の問題等であった。インターネットは有効な方策と考えられた。

先進国と開発途上国間の国際協働・協力に関する教育領域の文献は、1971 - 2005年間に14文献あり、内11件は1999年以降のものであった。協働内容は、看護教育者との協働（学部、修士、博士プログラムの作成含む）、看護実践家に対する継続教育、住民への教育であった。協働の過程に重要な点として、言語のみならず効果的なコミュニケーション方法の選択と維持、お互いの文化の違いを理解することであった。文化や信条を相互に尊重すること、その国の看護の役割を理解する事が方策といえる。

先進国間ならびに先進国・開発途上国間の国際協力・協働において、異文化理解が基盤であり重要であることが示された。違いは認識されるべきものであり、様々なコミュニケーションの方略が計画されるべきものであると考察された。

キーワード：国際、協働/協力、看護、人材育成、教育

### I. はじめに

聖路加看護大学は、1990年より2006年の今日までWHOプライマリヘルスケア・看護開発協力センターとしての国際協力・協働活動を実施してきている。その活動として、国際医療協力の効果的・効率的推進に資することを目的とする研究委託費制度での研究を2002年度より継続している。2002～2004年度には開発途上国での有効な看護技術移転・協力にかかわる日本人国際看護専門家（国際看護コラボレーター）の、卒前から現任・継続教育、及び大学院修士課程までの人材育成・教育プ

ログラム開発を行った。また、2005～2007年までの予定で進めている研究では、5つの開発途上国（ミャンマー連邦、南アフリカ共和国、アフガニスタン、フィジー諸島共和国、ケニア）が国連開発目標（MDGs）達成に近づくため、それぞれの地域看護力強化にかかわる多様な地域看護人材、看護専門職や地域住民協働者の育成を目的としている。さらに現在、聖路加看護大学は、韓国のヨンセイ大学、タイのマヒドン大学、米国のオレゴンヘルスサイエンス大学、カナダのマックマスター大学の看護学部と姉妹校協定、またカリフォルニア大学サンフランシスコ校と国際交流協定を結んでおり、中でもヨンセ

受付日 2007年2月2日 受理日 2007年4月27日

1) 聖路加看護大学, 2) 聖隷クリストファー大学, 3) 東邦大学, 4) 聖路加看護大学博士課程

イ大学、マヒドン大学とは相互の学生の短期研修を毎年行っている。

このような国際協力研究、また学生や教員同士の国際交流を通じ、その実施過程において様々な課題の存在も実感している。また、看護職ならびに地域住民等あらゆる場での人材育成の重要性も認識を深めている。

そこで今後の活動をより効果的に展開するためには、看護における教育的国際協力・協働モデルの概念化の構築が必要であると考えた。本研究では、その前段階として、看護における教育的国際協力・協働プロセスに関する課題とその方略を明らかにすることを目的として、既存文献の検討を行った。

## II. 文献検索と検討の方法

### 1. 文献検索と分析対象とする文献の選定

英文献は、データベース PubMed ならびに CINAHL を用いて全年の文献を検索した(2005年10月実施)。文献検索に使用したキーワードはタイトルに「international」、その他文中に「collaboration」「nursing」を含む国内で入手可能な英文献(①国際協働英文献)で、結果41件が選出された。また同様にタイトルに「international」「cooperation」、文中に「nursing」を含む全年の英文献(②国際協力英文献)の中で、対象国同士が限定され、その「国際協力」活動のプロセスが著された文献を選択すると11件に絞られた。英文献計52件のうち、実践の記述が無い解説や提言は除き、「研究」と「実践報告」に限ると31文献であり、さらに、その内容が教育的協働・協力に関するものに焦点を当てたところ、23文献となった。また、和文献も同様に検索したが、相手国(途上国)の現状報告や、国際看護専門家等に求められる能力を分析している文献が多く、異国間での協力過程に焦点を当てた記述は見あたらず分析対象外であった。

### 2. 文献の検討方法

文献検討は、Cooperの統合的レビューの方法論<sup>1)</sup>を参考に、「著者」、「文献分類」、「協働国」、「協働内容」、「成果」、「課題」、「方略」からなるコード表を作成し、分析対象となる23文献のデータを整理し分析した。

なお、本研究において「先進国」はOECD(経済協力開発機構)加盟国を指し、その他を「開発途上国」(以下「途上国」と定義した。

## III. 結果

分析の結果、1. 先進国間の看護における教育的協働・協力に関する9文献と、2. 先進国と途上国間の看護における教育的協働・協力に関する14文献に分類するこ

とができた。

### 1. 先進国間での看護における教育的国際協力・協働に関する文献

文献検索は全年の文献を対象に行ったものの、分析対象として抽出された全ての文献は1997年以降に発表されていた。

#### 1) 文献の種類

実践報告7件<sup>2)4)~6)8)~10)</sup>、評価研究2件<sup>3)7)</sup>であった。

#### 2) 協働国

国あるいは地域が明確な8文献すべてに米国が関与していた。米国との協働国として、英国<sup>4)9)</sup>、スウェーデン<sup>2)</sup>、フィンランド<sup>7)</sup>、東欧<sup>8)</sup>を含む欧州が6件、日本<sup>6)</sup>、韓国<sup>5)</sup>を含むアジアが2件、さらに、豪州<sup>7)</sup>、中央アメリカ、カリブ海諸国<sup>8)</sup>があげられていた。

#### 3) 協働内容

(1) 大学間の交流6件<sup>2)~7)</sup>、(2) 看護実践家への教育2件<sup>8)9)</sup>、(3) その他1件<sup>10)</sup>に区分された。(1) 大学間の交流には、学生及び教員が一方の国もしくは両国を訪問し交流するプログラムが4件<sup>2)~5)</sup>、インターネットを通じた教育が2件<sup>6)7)</sup>あった。(2) 看護実践家への教育には、直接的に実践家を教育するプログラム<sup>8)</sup>と、インターネットと直接的な交流の混合型教育<sup>9)</sup>があった。(3) その他には、学会における協働<sup>10)</sup>が含まれていた。

#### 4) 成果

参加した学生・教員の異文化理解やグローバルな視点の強化が4件<sup>2)4)6)7)</sup>、参加者の能力向上が3件<sup>3)8)9)</sup>、その他に、参加者の専門的知識の習得<sup>5)</sup>、教員同士の交流や協働研究の促進<sup>2)</sup>、インターネットによる教育は効果的かつ経済的方法であること<sup>6)</sup>などが述べられていた。

#### 5) 課題と方策

共通した課題として、特に直接、人と人が出会う交流の場合には財源の確保が問題となること<sup>2)3)8)</sup>、アジア圏の学生が米国学生と交流する場合には言葉の問題があげられていた<sup>5)6)</sup>。さらに、課題を(1)学生側、(2)教員側、(3)教育システム、(4)社会システムに分けて見ていくと、(1)学生側の課題には、相手国のヘルスケアシステムへの誤解<sup>4)</sup>、インターネットアクセスへの障壁、モチベーションの問題<sup>9)</sup>があった。(2)教員側の課題には、国際的活動への同調の遅れ、仕事の負担が増えること<sup>3)</sup>、教員がインターネットの活動を受け入れる必要があること<sup>7)</sup>があげられていた。(3)教育システムの課題では、評価<sup>2)3)6)</sup>に関する課題が多かった。(4)社会システムの課題は、米国では、契約書類といった制度上の規制があること<sup>3)</sup>、東欧では政治的・経済的変化や民族紛争があげられていた<sup>8)</sup>。

表1 看護における人材育成(教育)の国際協力・協働に関する文献レビュー 分析結果

区分	著者(年)	文献分類	協働国	協働内容(研究目的)	成果	課題、方略
先進国同士の協働	Leh SK <sup>21</sup> (2004)	実践報告	米国、スウェーデン	米国学生、教員がスウェーデンを訪問して交流、ビデオカンファレンスによる交流	・学生、教員が国際的な視点を養う ・学生の問題解決能力向上 ・教員の交流と協働研究の促進	・財源の問題 ・実施には、詳細な計画と方法的な評価が必要
	Ekstrom DN <sup>9</sup> (2002)	評価研究	米国、主に欧州	交換留学生受け入れ	・著者らは様々なストレスや怒りを体験したが、それらを超えることで個々の自由と自己理解が生じ、システムにも変化が現れた	・財源の問題 ・看護教員の国際的活動への同調の遅れ、仕事負担増 ・評価の困難性、米国の制度上の規制
	Scully J <sup>3</sup> (1998)	実践報告	米国、英国	米国学生が英国に訪問して学ぶ	・学生は英国のヘルスケアシステムなどを学んだ、国際的なヘルスケアの問題への意識を高めた	・米国学生の英国ヘルスケアへの誤った情報、固定観念→批判的分析には、ヘルスケアシステムの組織や、管理方法の理解が必要
	Lee HO <sup>5</sup> (1997)	実践報告	米国、韓国	韓国学生が米国に訪問し在宅看護を学ぶ	・両国の学生や教員の特徴がわかる	・言語の問題→書くことで解決、相手国を訪問し講義を受ける際に、ビジュアルなテキスト、ゆくり説明を受けるなどの配慮が必要 ・教員同士の密なコミュニケーションが成功の鍵
	Brandt Cl <sup>6</sup> (2003)	実践報告	米国、日本	学生がインターネットを通じ交流する	・インターネットは、文化の違いやグローバルな視野の理解を促進するための効率的、経済的方法である	・課題：日米の学年層の違い、学生のやりとりの調整が難しい、受講調整、日本人学生の低い英語レベル、評価の問題 →教員間の周到な計画、コミュニケーション、協働が必要
	Kirkpatrick MK <sup>7</sup> (1999)	評価研究	米国、豪州、フィンランド	学生対象にインターネットを通じた国際交流の効果を測定	・学生が国際的な意識を高めるといふ教育効果があった	教員がインターネットの活用を受けいれる考えを必要とする
	Wright S <sup>8</sup> (2005)	実践報告	米国、東欧、中央アメリカ、カリブ海諸国	米国の大学による他国の看護師・助産師への人材能力開発プログラム	・プログラムの参加を通じて、専門的役割を遂行するための能力を向上させた	・財源の問題、抵抗、雇用不足、看護師と医師間のヒエラルキ ・組織内でのリーダーシップ構造の変化 ・各国の民主化過程に対する政治的・経済的变化、民族紛争
	Leppa Cu <sup>9</sup> (2005)	実践報告	米国、英国	両国卒業生へのインターネットと訪問を通じた倫理教育	・インターネット教育は学生に協働する機会を付与、倫理的意思決定において洗練された批判的思考を実施できる	・インターネットアクセスの障壁やモチベーションの問題 ・異なるヘルスケアシステムの中で、共通性や違いを調査し、解決するためには、臨床実践での倫理的ジレンマの表出、比較が課題
	Lewis S <sup>10</sup> (1998)	実践報告		看護の協働をテーマにした学会の開催	・主なテーマとして患者教育と教育現場における情報技術とインターネットの活用を討議した	
	先進国と途上国の協働	Sherwood G <sup>11</sup> (2005)	実践報告	米国、中国	中国オリジナルの看護学修士プログラム基幹人員のレベルアップ→学士プログラムの改良	・初回は米国で教育、15名が看護学修士を獲得したが、中国への帰国は4名のみ ・以後、国内や近隣国で教育し、学士教育に資する人材84名を輩出
Girot EA <sup>12</sup> (2004)		実践報告	英国、ブラジル	女性のヘルスケア向上(ここではパートナーシップの本質について)	・ブラジルでの産科専門看護師の導入	・コミュニケーションの複雑性、時間概念の違い →相互のコミュニケーションの複雑性を認識する。展望の共有、相互尊重、それぞれがリスクを負う
Oakley D <sup>13</sup> (2004)		ケーススタディ	米国、中国	両国の大学教員間で、中国初の看護師開業の地域に根ざしたクリニカル運営を協働(ここではコミュニケーション手段の比較)	・中国初看護師開業クリニックの運営 ・協働の過程でのコミュニケーション手段「相互訪問」、「郵便」、「宅配便」、「e-mail」、「ファックス」、「電話」、「website」、を実用性コスト、協働の優先、結果の観点から評価	・相互の具体的な仕事予定の公な連絡 ・遠距離コミュニケーションの様式指定と頻度と概略内容 ・それぞれのコミュニケーションの評価改善のための時間線引き ・高価なコミュニケーション方法が必ずしも効果的ではなく、適切な手段を選ぶことが重要
Garfield R <sup>14</sup> (2003)		研究報告	米国、イラク	(論文は湾岸戦争後に看護が果たす役割についての歴史的研究記述)	・イラク政府と看護のリーダーがともに活動 →バグダッド大学看護修士プログラム設立 ・博士プログラムをイェメンにある大学に設立	・相手の視点やニーズを優先 ・相手国の保健専門家と政治家の継続的なパートナーシップを形成 ・個人、家族、コミュニティの経験にみあう疫学的、エスノグラフィックな、協働的、長期的参加型研究方法をとる ・PHCに基づく、コミュニティとのパートナーシップ
Ogilvie L <sup>15</sup> (2004)		研究報告	カナダ、ガーナ	ガーナの看護学修士課程プログラム作成	・ガーナの看護学修士課程プログラム作成 ・5年間のプロジェクトにより、双方の国際開発プロジェクトマネージャが強化	・Building capacityに必須なことは①相互の信頼、②曖昧さへの寛容、③未知の世界に進んで足を踏み入れること
Edwards N <sup>16</sup> (2000)		実践報告	カナダ、中国	カナダ・中国の教員間の相互交流	・主として中国側の学部教育強化→知識や技術のキャリアム交換(ケーススタディ、スモールグループワーク、ロールプレイ等を通して) ・6年間に6回のワークショップ共同開催	・準備として相互の文化を理解する(スタディツアー) ・ワークショップ前に基本情報について互いに質問を交換 ・研修方法は文化的背景や認識機能に影響する事を考慮 ・予め準備しなかった「評価」は、参加者のリフレクションを採用
Mapanga K <sup>17</sup> (1999)		実践報告	米国、ジンバブエ	ジンバブエ大学看護学修士課程プログラム作成	・ジンバブエ大学看護学修士プログラム作成 ・両国の大学の看護学部間で、collaborative faculty research Partnershipが構築	・コアコンテンツの科学的調査 ・ジンバブエ(途上国側)の研究科は両国の教員によって教授 ・ワークショップを共催
Concard NL <sup>18</sup> (1997)		実践報告	米国、ウガンダ	個人の看護教育者が途上国の看護学校で9ヶ月間教育をした体験の記述	・新入生を担当、後に、手術室実習生、看護マネージャーに教育。(海外留学生を迎え入れる立場にいた著者自身が異文化を体験したいと考え、ウガンダで看護学校教育への協力。)	・学生の変化を促進するには、①予想を含めた徹底的なオリエンテーション、②間違いを許す態度、③如才ない訂正は対象の困惑を避ける、④毎日かかわりを持つこと
Girot EA <sup>19</sup> (2005)		実践報告	英国、ブラジル	産科専門看護師の導入(ここでは変化の中での「人」「過程」の概念分析)	・正常分娩の概念が広く認められず、おもに薬物介入が求められていた状況で、ゆくりであったが、新たな「女性中心」のアプローチが認められた。	・文化、信条、思想の違いが課題 ・到達可能な目標(内容)を設定、 ・相互訪問 ・文化的影響→看護師医師関係、助産師医師関係、看護師助産師関係、専門職患者関係、変化に対する政治的影響を考慮
Rajacich D <sup>20</sup> (2001)		実践報告	カナダ、ヨルダン	ヨルダン看護師・教員へのCPR教授(のためのワークショップ報告)	・受講者からの評価が高く、10以上の病院で実施。500人以上の看護師(RN、准看護士)がCPR救助者、また26人のRNがCPRトレーナーとしての証明書を得た。	・“train-the-trainer”の概念 ・現地の施設でのワークショップ開催
Ash CR <sup>21</sup> (1999)		研究報告	米国、途上国	途上国看護職のがん予防知識の増加を目指すプログラムを提唱、自国での活躍を明らかにする	・プログラム前に比べ後は、参加した看護師たちは自国での活動を評価、企画するようになった。また、看護教育にも影響を及ぼした。患者教育、地域への教育も増えていた。	・参加者の慎重な選択(看護のリーダー)は重要な戦略となる。 ・政治的、専門的、社会的に影響があり、専門職としての目標が明確なリーダーは長期的な成功を導く。
Lowe AG <sup>22</sup> (1983)		実践報告	カナダ、ブラジル	ブラジルでの産科病棟のケア改善(臍処置を例に、陰壁と克服のためのプロセス記述)	・HOPEプロジェクトによるカウンターパートシステム。途上国側が「一番ふさわしい」と考えている従来の処置を、新しい方法で健康への危険がないことを示し変革に成功。	・途上国の医療に関する伝統的習慣の信条 ・新たな方法を導入する際の方略:①問題点の指摘、②研究手法を取り入れる、③職種を超えた協働、④障壁への対応、⑤研究成果の共有
Astrachan M <sup>23</sup> (1971)		実践報告	米国、途上国	家族計画プログラムの世界への普及(米国の某州立大学において)	・世界中から集まった助産師ら学生は、自国に戻り家族計画を推奨している。年に3回、1回は3ヶ月間で行われている。	・他のいくつかの近隣の機関と連携 ・世界中からの多大な協力、努力、財団、からの財務援助を受ける。
Mill JE <sup>24</sup> (2003)		研究報告	カナダ、ガーナ	ここでは国際間での質的研究における質の確保について、帰納的に検証し記述	・HIV易感染性の女性を対象とした参加型アクションリサーチ	・研究を始める前の訪問による状況の理解 ・相互に、情報をオープンにする ・相手のコミュニケーションのスタイルを理解する ・言語に課題を残さないよう通訳との密な連絡。

## 2. 先進国と途上国間での看護における教育的国際協力・協働に関する文献

分析対象となる文献は、1971年から発表されており、2005年までの間に14件が該当した。うち、1999年以降の文献は11件であるが、その内6件<sup>11)~13) 15)~17)</sup>が先進国と途上国の看護の教員同志の交流や、途上国での学部・修士課程の作成に関する協力であった。

### 1) 文献の種類

実践報告9件<sup>11) 12) 16)~20) 22) 23)</sup>、研究報告4件<sup>14) 15) 21) 24)</sup>、ケーススタディ1件<sup>13)</sup>であった。

### 2) 協働国

先進国側が米国の協働が7件<sup>11) 13) 14) 17) 18) 21) 23)</sup>、カナダが5件<sup>15) 16) 20) 22) 24)</sup>、そして英国が2件<sup>12) 19)</sup>であった。途上国側は、中国3件<sup>11) 13) 16)</sup>、ブラジル3件<sup>12) 19) 22)</sup>、ガーナ2件<sup>15) 24)</sup>、他にイラク<sup>14)</sup>、ジンバブエ<sup>17)</sup>、ウガンダ<sup>18)</sup>、ヨルダン<sup>20)</sup>が各1件ずつあり、また国名を特定せず多国が2件<sup>21) 23)</sup>であった。

### 3) 協働内容

途上国の看護教育者との交流・教育関連8件<sup>11)~18)</sup>、看護実践家への教育5件<sup>19)~23)</sup>、住民への教育1件<sup>24)</sup>であった。また、教育内容の領域が示されているものは、母子保健領域が4件<sup>12) 19) 22) 23)</sup>と多く、他はがん予防<sup>21)</sup>、CPR<sup>20)</sup>、HIV/AIDS予防<sup>24)</sup>が各1件であった。

### 4) 成果

教育に関するものでは、自国（途上国）での看護教育向上に資する人材育成、看護学士・修士・博士課程プログラムの改良や作成が5件<sup>14)~18)</sup>あり、実践に関しては、新たなもの（ケアの捉え方、役割、ケア方法）の導入3件<sup>19) 21) 22)</sup>、看護師活動のレベルアップ3件<sup>20) 21) 23)</sup>、開業看護師クリニックの運営1件<sup>13)</sup>で、その他2件<sup>18) 24)</sup>である。

### 5) 課題と方策

プロセス全体を通じて(1)互いの文化的背景の違いを認め<sup>12) 16) 19) 22)</sup>、(2)互いを尊重することの重要性が指摘されていた<sup>12) 14) 15) 19)</sup>。そこにはその国における看護の機能・役割、患者-医療者関係、医師-看護師関係などの理解が重要である<sup>19)</sup>ということも述べられていた。具体的な方策としては、(1)相互理解のために、①事前訪問<sup>14) 16) 19) 24)</sup>と、②情報の開示<sup>16) 24)</sup>、また③互いに展望や具体的な目標を共有することが重要とされた<sup>12) 19)</sup>。また、(2)効果的にプロセスを辿る手段として①研究的な手法（疫学的<sup>14)</sup>、科学的調査<sup>17)</sup>、問題指摘と成果の共有<sup>22)</sup>）をとること、②信頼でき効果的なコミュニケーションの方法の選択と維持<sup>14)</sup>、③適切な研修方法の選択<sup>16)</sup>も示された。④カウンターパート、研修の参加者には政治的、社会的な影響力の強いものを予め選択することも方略としてあげられた<sup>14) 20) 21)</sup>。ほとんどの教育研修等は途上国側で展開されており<sup>11) 12) 14) 15) 17)~20) 22) 24)</sup>⑤途上国（自国）の文化の中での教育は方略の1つと考えられていた<sup>11) 20)</sup>。

## IV. 考察

### 1. 「先進国-先進国」間の協力・協働の特徴

先進国間での人材開発・教育協働は、米国において活発であるといえる。その協働の範囲は、欧州、アジアさらに、多地域を含む国際協働が近年活発化していることが示された。その内容は、先進各国における看護現場やヘルスシステムの共通性や違いを比較することによって、学生や教員の異文化理解やグローバルな視点の強化、自国における看護実践能力の向上という成果を得る点において共通性が認められた。

教育の国際協働の背景には、近年インターネットをはじめとした情報技術のめざましい発展があり、e-mailが情報交換の手段として活用されていることが報告されていることから、効率的で経済的な協働が可能になっていると考えられる。他方、両国間の相互理解のためには、人と人とが直接訪問し、会って話し合うというコミュニケーションを通じて、相手国への相互理解をより強化できるとする指摘もあり<sup>25) 26)</sup>、2つの手段を活用することが重要であろう。

また、共通した課題には、財源や評価の問題があげられていた。今後、ますます増加するであろう先進国間での協働活動を実践知として役立てるためには、それらの活動を積極的に報告するとともに、アクションリサーチのような研究による取り組みも必要であると考えられる。

### 2. 「先進国-途上国」間の協力・協働の特徴

教育領域での協力・協働活動は、先進3ヶ国、米国、カナダ、英国と途上国の協働活動が報告されていた。

協力・協働の特徴として、先進国側の研究者が途上国の看護実践家、看護教育関係者、あるいは住民に対しての協力活動の報告が多かったが、それぞれの国の間には健康格差が背景となっていると考えられた。

協力の成果領域は、プライマリヘルスケアを背景としていることが特徴であった。WHOとUNICEFが提唱する“Health for All”<sup>27)</sup>を実現するためのアルマ・アタ宣言にあるように、プライマリヘルスケア（以下、PHCとする）は、「自助と自決の精神に則り、地域社会または国家が開発の程度に応じて負担可能な費用の範囲で、地域社会の全ての個人や家族の全面的な参加があって、はじめて彼（女）らが広く享受できうるもの」である。PHCの推進には、その国やコミュニティで受け入れられるケアが求められ、経済的にも継続可能な活動である必要がある。その点からも、先進国と途上国間では、途上国側の人々が自国民の健康回復・維持・増進を担えるよう、人材育成あるいは教育領域での協働としてかかわることは当然と考える。

1999年以降の報告には、先進国と途上国の教員同士の協働が顕著に見られ、カウンターパートを教育機関に

求める事で、研究基盤での教育的なかかわりがスムーズに進むということが示唆される。

先進国と途上国との人材育成・教育領域での協力・協働において文化の相違、生活習慣・環境や信条の違い、その国での看護の立場や役割を理解・把握し、教育内容や方法を考慮するには、先進国側の研究者が、現地へ赴く事で理解をより深められる。また、協力過程が終了した後も、継続可能な内容であるように当初から計画する必要がある、途上国側に教育の場をおくこと、殊に継続的なコミュニケーションの手段を確保することが重要であると思われる。

### 3. 「先進国－先進国」と「先進国－途上国」間の協力・協働の特徴の共通性

先進国間ならびに先進国・途上国間の国際協力・協働において、異文化の理解が教育協力・協働においても基盤でありかつ重要であるということが報告されており、国際協力・協働活動における共通事項として考えられた。協働のプロセスにおいては、伝統的なコミュニケーション手段である相手国への訪問は、共通して報告されており、今後も重要な方策として協働活動に組込むことが必要であると考えられた。特に先進国と途上国間における協力・協働において、文化、生活習慣・環境や信条、看護の立場や役割の理解の下、途上国の人々の自助と自決力の強化支援を目指すことが求められていると考える。

## V. おわりに

看護における教育的「国際協働」または「国際協力」に関する23文献を、「先進国間」と「先進国と途上国間」に分類し、分析した。それぞれの国際協力・協働活動の共通する特徴が抽出された。特に、相互の違い：環境や信条、看護の立場や役割の理解、を基に看護における人材開発・教育領域での国際協力・協働活動が進められることが必要な課題であり、国際協働者間のコミュニケーションを深める方略を計画に含めることの重要性が示唆された。

謝辞：本研究は、平成14～16年度国際医療協力委託研究費の助成を受けて行われた。また、聖路加看護大学客員教授 Caroline McCoy White 先生には、英文抄録作成に関する事、他多くのアドバイスをいただいた。

## 引用文献

- 1) Cooper H., Hedges LV, eds.(1994). The handbook of research synthesis. New York: Resell Sage Foundation.
- 2) Leh, SK., Robb, WJ., Albin, B.(2004). The student/faculty international exchange: responding to the

- challenge of developing a global perspective in nursing education. *Nurs Educ Perspect.* 25(2). 86-90.
- 3) Ekstrom, DN. & Sigurdsson, HO.(2002). An international collaboration in nursing education viewed through the lens of critical social theory. *J Nurs Educ.* 41(7). 289-94.
- 4) Scully, J., Birchfield, M., Munro, L.(1998). An international nursing course: the health system, England. *Nurs Health Care Perspect.* 19(5). 208-13.
- 5) Lee, HO., Hwang, AR., Pierce, CA., Fitzpatrick, JJ. (1997). International collaboration for home care education, Part I: creating the partnership. *J Prof Nurs.* 13(4). 256-61.
- 6) Brandi, CL., Lockhart, JS., Hara, D.(2004). Overcoming barriers in international keypal exchange programs: an exemplar between Japanese and American nursing students. *Nurse Educ.* 28(4). 156-60.
- 7) Kirkpatrick, MK., Brown, S.(1999). Efficacy of an international exchange via the Internet. *J Nurs Educ.* 38(6). 278-81.
- 8) Wright, S., Cloonan, P., Leonhardy, K., Wright, G. (2005). An international programme in nursing and midwifery: building capacity for the new millennium. *Int Nurs Rev.* 52(1). 18-23.
- 9) Leppa, CJ., Terry, LM. (2004). Reflective practice in nursing ethics education: international collaboration. *J Adv Nurs.* 48(2). 195-202.
- 10) Lewis, S., Browne, J. (1998). Third Nursing Academic International Congress. *Nurs Inq.* 5(2). 119.
- 11) Sherwood, G., Liu, H. (2005). International collaboration for developing graduate education in China. *Nurs Outlook.* 53(1). 15-20.
- 12) Girot, EA., Enders, BC. (2004). International educational partnership for practice: Brazil and the United Kingdom. *J Adv Nurs.* 46(2). 144-51.
- 13) Oakley, D., Yu, MY., Lu, H., Shang, S., McIntosh, E., Pang, D., Van Doren, E.(2004). Communication channels to help build an international community of education and practice. *J Prof Nurs.* 20(6). 381-9.
- 14) Garfield, R. (2003). Health Care in Iraq. *Nursing Outlook.* 51. 171-177.
- 15) Ogilvie, L., Allen, M., Laryea, J., Opare, M. (2003). Building capacity through a collaborative international nursing project. *J Nurs Scholarship.* 35(2). 113-8.
- 16) Edwards, N., Bunn, H., Morales-Mann, E., Papai, P., Davies, B. (2000). International collaborative workshops. 6-year partnership between Canada and

- China. *Nurse Educ.* 25(2). 88-94.
- 17) Mapanga, K., Ndlovu, R., Mapanga, M., Mudokwenyu-Rawdon, C., Brooteñ, D., Morris, D., Clark, J., Wykle, ML., Modly, D., Youngblut, JM.(1999).A model for international research collaboration. *Int Nurs Rev.* 46(4). 117-21.
- 18) Concard, NL.(1999). International perspective: teaching nursing in a developing country. *Nurse Educator.* 22(4). 12-24.
- 19) Girot, EA., Enders, BC., Wright, J.(2005). Transforming the obstetric nursing workforce in NE Brazil through international collaboration. *J Adv Nurs.* 50(6). 651-60.
- 20) Rajacich, D. (2001). Development of human resources in nursing: a collaborative initiative in CPR. *The J of continuing education on nursing.* 32(1). 27-30.
- 21) Ash, CR. (1999). Cancer prevention education in developing countries: toward a model for nurse educators. *Cancer Nursing.* 22(5). 358-369.
- 22) Lowe, AG. (1983). The counterpart system in international nursing. *Pediatric Nursing.* 9(4). 259-261.
- 23) Astrakhan, M. (1971). International cooperation in family planning. *Nurs Outlook.* 19(2). 103.
- 24) Mill, JE., Ogilvie, LD.(2003). Establishing methodological rigour in international qualitative nursing research: a case study from Ghana. *J Adv Nurs.* 41(1). 80-7.

#### 参考文献

- 25) Krajewski-Jaime, ER., Brown, KS., Ziefert, M., Kaufman, E. (1996). Utilizing international clinical practice to build intercultural sensitivity in social work students. *J of Multicultural Social Work.* 4(2). 15-29.
- 26) Williams, J., Skirton, H.(2002). Internaitonal collaboration in genetic nursing. *Nursing Standard.* 17(5). 38-40.
- 27) Primary Health Care, A joint report by the director-general of the WHO and the executive of the UNICEF, Geneva New York, 1978.

# Literature Review of International Nursing Cooperation/Collaboration with Educational Relationship Focused on Human Development

Yoshimi Yamazaki, Fumiko Kajii, Junko Tashiro, Michiko Hishinuma  
Shigeeko Horiuchi, Yuko Hirabayashi, Naoko Arimori, Hiromi Eto

Yumi Sakyo, Akiko Hayashi  
(St. Luke's College of Nursing)

Yoshimi Suzuki  
(St Luke's college of Nursing Doctoral Course)

Masako Sakai  
(Seirei Christopher University)

Naoko Hayashi  
(The Toho University)

The purpose of this study was to identify, through an integrative literature review, the challenges to and strategies for international nursing collaboration/cooperation among organizations seeking to promote the education of nurses and enhance the capacities of nursing personnel. We searched for relevant articles using CINAHL and PubMed, without time restriction. We found 31 articles with the term INTERNATIONAL and COLLABORATION or INTERNATIONAL and COOPERATION in their titles, and NURSING in their texts. Of these, 23 articles were concerned with collaborations for education and human resource development. We classified these articles into two categories focusing on their collaborative processes, outcomes, challenges and strategies.

Nine articles published between 1997 and 2005 were classified in the first category: international nursing collaboration/cooperation between organizations in two developed countries. Major contents of collaboration in this category were nursing student exchange programs and human resource development for practitioners. Common challenges observed here were budget management, language barrier, and evaluation of collaborative programs. Internet was considered as a useful tool of communication. 14 articles published between 1971 and 2005, of which 11 published after 1999, were classified in the second category: international nursing collaboration/cooperation between organizations in developed countries and organizations in developing countries. Programs in this category were aimed at developing undergraduate or graduate courses/programs, training practitioners, and providing community education in the developing countries. Common challenges observed here were communication difficulties, which included not only language barrier but also lack of reliable means for communication, and understanding different cultural backgrounds. The key is to respect each culture and its beliefs and to understand roles/functions of nursing in respective country.

Our conclusion is that mutual understanding between cultures is essential for successful international collaboration. Differences between cultures should be well recognized, and various ways of communication should be established.

**Keywords:** International, Collaboration / Cooperation, Nursing, Human Resource Development, Education